

37

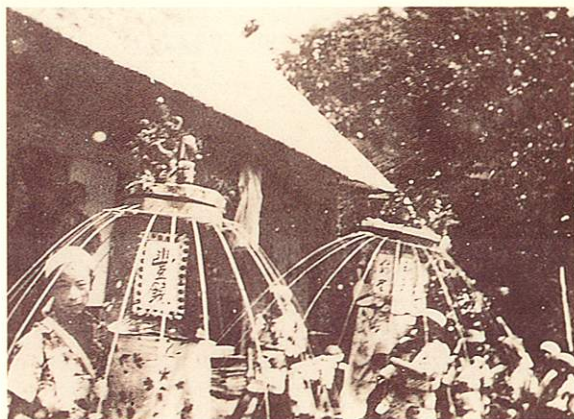
祭と芸能

■福生天王囃子
てんのうばやし

福生神明社にある八雲神社の祭礼は、昔は「天王様のお祭」とよばれ、江戸時代後期からつづく村の祭である。明治初期に八月一日が本祭となった。万灯を飾り神輿をかつぐ伝統とともに、天王囃子が受け継がれている。この囃子がいつごろから伝えられていたのかは定かではなく、昔、福生に住んでいた人が京都で祇園囃子を習い、それをこの地に伝えたのが始まりだという。



天王囃子 このように太鼓を担いで歩く。昔はこれより小型のものが多かった。



天王祭の万灯(大正15年8月1日)

福生天王囃子は、大太鼓一つと笛が五、六人で構成されている。大太鼓は、竿を固定して前後を人がかつぎ、それを二人から四人が笛の音に合わせて叩きながら行進する。天王囃子に使われる笛は明みん笛てきという独特のもので、指孔は六



本町の屋台囃子(福生駅前通り 昭和23年頃) 屋台は近村から借りてきたもの。

つしかなく(ふつうは七つ)、吹口と指孔のあいだに孔があり、そこに竹紙(ちくし)(竹筒のなかにできた薄い紙状の膜)を貼って微妙なふるえが起ころうになっている。

この天王囃子は、祭の変化とともに太平洋戦争後その姿を消してしまっただが、一九八二年(昭和五十七)に、この囃子に愛着をもつ多くの人の協力によって復活し、保存会がつくられて、若い人たちにその伝統が伝えられている。

■福生重松流囃子じゅうまわりゅうばやし

明治時代の初期、重松流囃子の創始者である所沢の古谷重松は、商売の關係で牛浜地区に滞在したときに、福生をはじめ羽村、二宮(あきる野市)、平井(日の出町)の若者に囃子を指導し、各地で囃子連をつくった。しかし福生では長くつづかずにとだえてしまった。

その後、一九四七年(昭和二十二)になって、戦後の低迷した空気の流れる地域を活気づけようと、福生の青年たちが羽村や二宮の人たちに教えを求め、青年団の支部ごとに新しく囃子連を結成した。こうして、重松流祭囃子が夏祭に登場するようになった。そして、都市化とともに夏祭が町内会を中心にさかんになるにつれ、囃子連も町内会単位で結成されるようになり、復活した重松流囃子は、現在も二代目、三代目に引き継がれ、囃子の山車は祭に欠かせないものとなっている。